# なぜ、洪水を受忍しなくてはならないのか？

細川　ゆう子

日本に人が住み始めたのは、川のそばでした。川には、魚や貝などの食料があり、生きるために水が必要だったからです。やがて、稲作の技術が伝わり、川の水が大量に必要になりました。だから日本人は、洪水にあっても日照りに苦しんでも、川のそばに住みつづけました。明治時代になって伝わった欧米の高い土木技術は、「洪水をなくせるかもしれない」夢の技術に思えたことでしょう。けれどもそれは、自然を痛めつけ、弱らせて制御しようという、今までの、自然と折り合いをつけながら生きてきた日本人のライフスタイルをまったく変えるものでした。

「洪水０」を望んで、公共事業をくり返してきた日本人は、今、一人一人が、心の構造改革を迫られています。急いで価値観やライフスタイルを転換することが、必要になってきました。これまでの努力により、確かに洪水は減りました。その間に、流域の事情は一変しました。川のはばを狭め山を切り開いてまで、宅地が増やされ、流域の人口は急増しました。本来洪水の多い地域にすみながら、それを自覚する人は少なく、洪水に備える意識が希薄になりました。一方で地球環境の変化の影響で、今までは考えられなかった降雨による洪水が増えています。「洪水０」を目指すことは、万一「洪水が起こった場合、大災害になる」ことと表裏一体だったのです。河川の整備は進んでいるのに、流域の環境、地球環境などとトータルで考えると、大洪水の危機は増大しているのです。この矛盾をなくすには、日本人全員が「洪水を完全に無くすことは不可能である。」と言う前提に立つ必要があります。その上で、「洪水の回数を減らすこと」を優先するのか、「洪水の回数を減らすことより、洪水が起こった場合の被害を最小限に食い止める」ことを優先するのかを選択しなくてはなりません。少なくとも、猪名川は典型的な都市型河川であり、大洪水がおこった場合の被害の大きさを考えれば、洪水の被害を抑えることを最優先にしなければならないことは、明白だと思います。河川改修のために必要だった予算は、洪水の被害を抑えるために向けていかなくてはなりません。川の個性をよく知った上で、最善の策を取らねばなりません。手間のかかる作業になるでしょう。けれどもそこから、川の個性に合わせ、平常時も考慮して地域の実態にあった河川環境を考えるゆとりも生まれます。

災害が起こることを前提に暮らし、ある程度の被害を覚悟することは、今までの価値観で言えば、耐えがたいことのように感じますが、もともと、日本人はそういう暮らしをしていたのです。できないはずはありません。むしろ、何もかも行政任せにしてどうなったのかを考えれば、この変化はよい兆候です。阪神淡路大震災のとき、被災者の援助、救助、災害からの復興に、多くのボランティアの活躍が希望を与えたことは、記憶に新しいところです。災害の被害を食い止めるために、個人がそれぞれ知恵を絞り、地域で協力し、行政と協働することができれば、国民は自らの力に自信を取り戻し、失った地域のコミュニティを取り戻せるでしょう。それらは、金額では計れない価値があります。日本人の生活全般に波及効果があるからです。恐れず洪水に備え、自然との共生の道を模索することが、日本人の急務なのです。